様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2024
課題番号：２１Ｋ０１０９０

研究課題名（和文）山岳宗教としての修験道の「文化的景観」化をめぐる問題の研究

研究課題名（英文）A Study on Cultural Landscape and 'Shugendo' as a Mountain religion

研究代表者
田中　滋（Tanaka, Shigeru）

龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：６０１５５１３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　修験道廃止令などによって打撃を受けた修験道の研究は、明治以降の日本の神道国教化政策を分析する上で重要である。その修験道が世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」（2004年）の核となる宗教として評価された。かつて禁止された修験道が、日本固有の宗教としてグローバルに高く評価され、熊野詣に多くの人が訪れている。
　しかし、修験道は、オーソドキシー（教義への忠実）ではなく、まさにオーソプラクシー（修行・儀礼への専念）に特化した宗教であり、眼差すこと（オーセンティシティの判定）が中心の観光との関係が問題となる。本研究は、各地の霊山での調査とオーソプラクシーの理論研究とによってこの問題に取り組んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　かつて禁止された修験道が、今や日本固有の宗教としてグローバルに評価され、霊山における観光の核となっている。しかし、修験道は、オーソドキシー（教義）ではなく、オーソプラクシー（修行・儀礼）に特化した宗教であり、「眼差す」ことが中心の観光との関係が問題となる。本研究の社会的意義は、この両者の両立可能性について研究したことにある。
　オーソプラクシーは、功利主義的な行為類型の対極にあるが、社会学はその理論化にほとんど注意を払ってこなかった。本研究は、オーソプラクシーという行為類型の特性を明らかにすることが社会学理論や現代社会の分析にどう貢献できるのかを探求した研究である。

研究成果の概要（英文）：The study of Shugendo, which was severely damaged by the Abolition of Shugendo Edict, is crucial for analyzing Japan's Shinto Nationalization policies since the Meiji period. Shugendo suffered such damage has been recognized as the core religion of the UNESCO World Heritage Site “Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range” (2004). Despite having been banned in the past at the national level, Shugendo is now globally recognized as a “unique Japanese religion”, attracting numerous visitors from abroad to the Kumano pilgrimage sites. However, Shugendo is a religion specialized in orthopraxy (dedication to practice and ritual) rather than orthodoxy (faithfulness to doctrine), and its relationship with tourism, which focuses on authenticity, poses a problem. This study addresses this issue through field research at sacred mountains across Japan and theoretical research on orthopraxy.

研究分野：宗教社会学

キーワード：修験道　観光化　文化的景観　オーソプラクシー　大峰山　オーセンティシティ　ジェントリフィケーション　世界遺産

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで国家と宗教の関係（政教分離問題）についての研究を進めてきたが、神仏分離令や修験道廃止令によって大きなダメージを受けた修験道の研究は、明治以降の日本の宗教政策、なかでも神道国教化政策を分析する上で重要である。

その修験道が世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」（2004 年）の「文化的景観」の核となる宗教として評価された。かつてナショナル・レベルで禁止された修験道が、「日本固有の宗教」としてグローバルに高く評価され、熊野詣に多くの人が外国からも訪れている。

しかし、修験道は、オーソドキシー（教義への忠実）ではなく、まさにオーソプラクシー（修行・儀礼への専念）に特化した宗教であり、**眼差**すこと（オーセンティシティの判定）が中心の観光と両立可能であるのかどうか、どうすれば両立可能となるのかが研究上の疑問としてあり、その答えを求めることが研究上の課題となっていた。

２．研究の目的

大峰山麓の洞川地区（奈良県天川村）は、霊山を舞台とした観光化においてもっとも成功した事例であるが、そもそも観光化と修験道のオーソプラクシーが両立できるのかどうか、そしてそれを左右する要因は何なのかを明らかにすることが研究の主たる目的となる。

この研究は必然的に他の霊山との比較をともなうことになるが、本研究では、次の①～⑤**の各要因を中心に比較を行う。①各霊山における神仏分離・排仏毀釈の経緯や修験寺院の存亡、②霊山の土地（境内・建物、山林）所有の帰趨、③行者（俗信徒）の組織化形態と修験者（宗教者）の関係、④登拝修行におけるオーソプラクシーとコミュニタス、⑤修験寺院と神社の対立である。**

そして、これらの①～⑤**の要因が、⑥講の存続＝修験道の大衆的基盤の存続や⑦霊山の観光化にどのように作用しているのかを明らかにすることがより具体的な目標となる。**

さらに、修験道を特徴づけるオーソプラクシーを社会学理論においてどう位置づけるのかについての理論研究を進めること、これがもう一つの目的となる。ただし、この理論研究の成果については、長文を要するためこの研究成果報告書では割愛する。

３．研究の方法

(1)修験道の観光資源化に関する調査

修験道の文化的景観化や観光資源化が洞川地区の宗教者や人びとにどのような影響を及ぼすのかをインタビューや資料・文献によって明らかにする。また、かつては大峰山への第一の登拝基地であった吉野地区（奈良県吉野町）においても同様の調査を行なった。

(2)他の修験霊山との比較

全国には修験道の聖地とされる霊山が数多く存在している（出羽三山、英彦山、石鎚山など）。本研究では、大峰山とそれらの修験の霊山との比較を観光化を焦点としておこなった（2021～2024 年度大峰山、2021 年度石鎚山、2022 年度英彦山、2023 年度出羽三山と白山）。

４．研究成果

①各霊山における神仏分離・排仏毀釈の経緯や修験寺院の存亡

今回の研究で実際に調査を行うことができたのは霊山のほんの一部に過ぎないが、それでも明治初期における神仏分離令や修験道禁止令が各地の修験に与えた影響はまさに多様であることを思い知らされた。

石鎚山では、修験寺院が廃絶され、まったく新たに設立された石鎚神社に修験の信者が吸収されるという経過を辿っている。既存の神社と修験寺院が対立し、神社側に有利に事態が推移するという構図は各地で見られるが、石鎚山のケースは特異であると言えるかもしれない。また、出羽三山では、戊辰戦争の結果、明治政府の宗教政策の影響が遅くなり、それが神仏分離や排仏毀釈の様相に影響を与えている。

②霊山の土地（境内・建物、山林）所有の帰趨

修験道に対する弾圧の歴史やその後の経過を研究する上で霊山の境内地・建物や山林などの土地所有帰属問題が非常に重要であることが明らかとなった。

霊山の土地所有問題、修験道寺院が所有する境内地や林野が明治初～中期に誰の所有に帰したのかは、神仏分離令（明治元年）に数年遅れてなぜ修験禁止令（明治 5 年）を敢えて発出されたのかという、修験道研究における以前からの疑問に答えるための手掛りとなると同時に、各霊山における修験寺院や講のその後の動向を調査する上で重要である。

石鎚山では、修験の山岳修行にとって核心的に重要な山頂部が神社の所有となり、いまだに修験寺院は登拝修行のためにそこに立ち入ることができない有り様である。

洞川地区は、大峰山の境内地を除く山林の多くが入会地として明治初期に認められ、非常に大きな土地を手に入れることになった。この入会地の経営によって洞川地区の財政基盤は安定し、戦後には洞川地区が観光化に取り組む際の安定財源となった。

③行者（俗信徒）の組織化の形態と修験者（修験寺院）の関係

この関係が、参拝の形態を左右し、それが神仏分離や修験道禁止の難局を乗り越えることを可能にし、また不可能にした。

大峰山は、修験寺院が神仏分離や修験道廃止の難局を大きな痛手を被りながらもなんとか乗り越えたことで、修験の霊山として残ったが、英彦山では、神道、仏教、修験道の三者の複雑な対立関係の結果、幕末にすでに修験道の根絶と神道化の徹底がおこなわれた。

こうした差異を生み出したひとつの要因として考えられるのが、行者（俗信徒）の組織化の形態と霊山の修験者（修験寺院）**との関係である。大峰山で登拝修行を行う大阪や堺などの講は本山派や当山派といった特定宗派に属することなく、またその財政力や行者の数の多さなどを背景として修験寺院からの独立性が高く、修験道禁止令の後も、その禁止令を無視して大峰山への登拝を重ねたと言い伝えられている。そして、現在でも大峰山の戸開け・戸閉めの行事においても重要な役割を果たしている（阪堺八講）。石鎚山の講もやはり独立性が高く、石鎚山の神道化の後も修験流の登拝修行にこだわり、石鎚神社は、戦後のことではあるが、神社の役員を代表者とする修験道の宗教法人（石鎚本教）を設立せざるを得なくなっている（昭和 21 年）。一方、英彦山では、英彦山の神道化以降、講の登拝は途絶えたと言われている。また、出羽山においては、講は存続はしたものの、登拝修行は神道流に変更されている。**

もう一つ注目すべきことは、登拝修行の基地ともなる宿坊の経営主体の問題がある。洞川の宿坊は、その歴史的経緯から俗人によって経営されていたがゆえに廃絶を免れたのに対して、英彦山や出羽山では修験寺院や修験者が運営に携わっていたことで宿坊は廃絶されたり、廃絶の危機に瀕したりもしている。この違いは、④登拝修行におけるオーソプラクシーとコミュニタスで論じる、行者がそのオーソプラクティカルな登拝修行を行うに当たってどの範囲の人々とコミュニタス的関係に入るのかという問題と結びついている。

④登拝修行におけるオーソプラクシーとコミュニタス

登拝修行においては、オーソプラクティカルな**修行を共にする仲間の行者との間に平等・対等なコミュニタス的関係が生まれる。そうした関係を共に経験した人々は、かつては「死んだら大峰山で会おう」と誓い合ったという。**

洞川地区では、毎年の定宿として行者の登拝修行を支える宿坊の主人やその家族は行者たちとあたかも親戚・家族のような関係となり、オーソプラクティカルな登拝修行におけるコミュニタス的結合の外延的な部分を構成する存在となる。

「洞川の人は観光客にとても温かい」と多くの観光客が喜び、また「洞川は行者に優しい村だ」と洞川地区と競合関係にある吉野の修験者にすら言わしめるのは、こうした宿坊と行者の関係を基盤としてのことであろう。

こうした宿坊と行者との関係は、他の地域の宿坊では、宿坊の主人＝宗教者であるがゆえに、行者は洞川の宿坊に対するような親しみを覚えにくいのではなかろうか。

⑤修験寺院と神社の対立

明治初期における出羽三山における修験道への弾圧の激しさを昨日の出来事のように語る住職たちの言葉に歴史の重さを感じたが、出羽山でも石鎚山でも修験寺院の神社に対する反感や悪感情は連綿として後世に引き継がれている。しかし、吉野では、神社に対してよりも自分たちの土地（寺領）を奪った洞川の人々への反感が大きい。

しかし、彼らの間に神仏分離や修験道廃止などの弾圧を行った政府に対する反感というものはあまり感じられないのはなぜであろうか。遠い政府よりも近くの神社や他地区の方が憎しみの対象となりやすいのであろうか。

⑥講の存続＝修験道信仰の大衆的基盤の存続

洞川地区でも講や行者の数はこの 2～30 **年ほどの間に** 3 **分の** 1、4 **分の** 1 **に減少したという。それは、従来の講の存立基盤であった都市や農村の地域社会が流動化し、かつての地域的紐帯を維持できなくなっていることに主に原因を求めることができるが、これまで何とか講が存続してきたのは、大峰山を拠点とする講が修験者（聖職者）や修験寺院からかなりの独立性を保ち、なおかつ洞川地区では定宿とする宿坊の主人や家族を親戚や家族のように考え、洞川を第二の故郷のように考えてきたがゆえのことであろう。**

⑦霊山の観光化

大峰山での登拝修行を終えた行者は、宿坊で「精進落とし」の賑やかな宴会を催し、かつては若い行者たちは宿坊街の一角の歓楽街へと繰り出し、「新人」と呼ばれる初参加の若者は売春宿で「筆下ろし」をしたという。ここに見られるのは、＜聖＝非日常＞の中で営まれる＜苦行と乱痴気騒ぎ＞のダイナミズムである（E.リーチ 1990）。乱痴気騒ぎも＜聖＝非日常＞の一部なのである。この儀礼の過程は、オーソプラクシーに特化した修験道にとってきわめて重要である。

ところが、洞川地区では、講や行者の減少によって宿坊の経営が苦しくなり、近年では宿坊街の独特の雰囲気や名水、山岳景観などを資源とする観光地化が取り組まれている。

近代に生まれた行動主義心理学の＜認知→評価→行動＞図式とは異なり、前近代においては評価の比重は大きくはない。認知が引き起こす行動が定型化されているからである。これは伝統的

な修行や儀礼・作法への専念としてのオーソプラクシーと同形のものである。これに対して、近代においては、行動主義心理学の図式通りに、人びとは慎重に状況判断（評価）を行なった上で、その後に目標達成のための主体的な行動へと向かう。

しかし、近代のそうした人びとも、彼らにとっての非日常空間である観光地においては主体的な行動に移る必要はない。観光対象を眺め（認知）、称賛・貶下する（評価）だけでよい。緊張感をともなう日々行動から解放された観光客はあくまでも眼差す消費者なのである。

この観光客の眼差しは、何がオーセンティックなのかについて判定しようともする。観光客は観光対象のオーセンティシティ（真正性）の厳格な判定者なのである。しかし、そのオーセンティシティは、山中（2016）が主張するように、消費者としての彼らが表象したものに他ならない。

このような観光客に＜聖＝非日常＞の中で営まれる＜苦行と乱痴気騒ぎ＞のダイナミズムは理解できない。そうなれば、このダイナミズムを可能にする「猥雑なもの」や「差別的なもの」が観光対象に混在することは許されなくなる。こうした「猥雑なもの」や「差別的なもの」は観光客の目から見れば、オーセンティックな宗教からはかけ離れたものなのである。こうして、洞川地区の売春宿が問題視され消滅することになる。洞川地区では、観光化にともなって、いわばジェントリフィケーションが進行しているのである。

これは、オーソプラクシーという観点から見たときの観光化の負の側面であるが、先にも述べたように、行者の登拝修行を支える宿坊の主人やその家族は行者たちとあたかも親戚・家族のような関係となり、オーソプラクティカルな登拝修行におけるコミュニタス的結合の外延的な部分を構成する存在となる。そして、このことが、「洞川の人は観光客にとても温かい」と多くの観光客に言わしめ、それがいわゆるリピーターを生み出す原動力にもなっている。これは、洞川地区が観光化を進める上で、大きな財産である。

そして、この一般観光客の受け入れは、宿坊の経営を成り立たせ、講が登拝修行をするための宿泊インフラの維持に役立つことにもなる。間接的ではあるが、観光化が講の存続の基盤となっているのである。

オーソプラクシー（修行・儀礼への専念）に特化した宗教である修験道と**眼差**すこと（オーセンティシティの判定）が中心の観光とが両立可能であるのかどうか、どうすれば両立可能となるのかという疑問に対する現時点での暫定的な答えについて、これまで述べてきたことから言えることは、オーソプラクシーを基盤とするコミュニタス関係の広がりを宗教者や地域の人々が観光に訪れる人々と共有できるかにかかっているということである。

これをどう具体化するのかは各霊山のあり方によって多様なものであろうし、同時に、現在、「体験型観光」が観光一般の一つのトレンドとなっていることの意味を考えるヒントともなろう。

参考文献：

1. **リーチ**, E.1990 **年『人類学再考』思索社。**
2. **山中弘** 2016 **年「宗教ツーリズムと現代宗教」『観光学評論**』Vol.4-2**：**149-159 **頁。**

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉田　竜司 (Yoshida Ryuji) (10291361)	龍谷大学・社会学部・教授 (34316)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関